

特集「大正・昭和前期の神道と社会」に寄せて

企画・編集委員 阪本 是丸

茲に復刊第五十一号をお届けする。本号では「大正・昭和前期の神道と社会」という主題で特集を組んだ。特集にふさわしい数多くの論文や関連のシンポジウム等を悉無く掲載することが出来たことに安堵するとともに、その内容の充実ぶりにも聊かの自負を覚えるものである。編集者冥利に尽きると実感しつつ、この「あとがき」を書くことの出来る仕合せを嘯み締めるところである。

とはいっても、特集論文だけでも十六編もあり、さらには今年七月に開催された関連シンポジウム「大正・昭和前期の神道と社会」で展開された白熱の議論、あるいは研究例会の講演録、研究ノートなど、盛り沢山の内容の一端についてこの限られた紙幅の「あとがき」で言及することは到底不可能である。それ故、ここでは少しく気儘に特集号を編んだ想いや意図などについて記すことにする。

謂うまでもなく、本明治聖徳記念学会は大正元年十一月三日に故加藤玄智博士の尽力によって創設された旧「明治聖徳記念学会」（大正九年に財団法人となった）に淵源する。本紀要が『明治聖徳記念学会紀要 復刊』と称するのもその故である。この旧「明治聖徳記念学会」は、その機関誌（紀要）として大正二年二月に『明治聖徳記念学会紀要』第一巻を発刊したのを

皮切りに、戦時下の昭和十八年十月までに通巻六十巻の『財団法人明治聖徳記念学会紀要』を刊行し、大正・昭和前期における人文系の学術・文化の進展に多大の貢献を成した。正しく「大正・昭和前期」を代表する学会誌でもあったのである。

かかる由縁を有する本学会であるから、従来の定番ともいふべき何々の記念や周年を対象とする特集の企画だけではなく、時代・対象をより広げた或るテーマのもとに特集を組むこともあって良いだろう、との声が企画・編集委員会で持ち上がったのである。「大正期」とか「昭和前期」といった時代区分で近代日本の歴史が語れるのか、という議論もあることは承知している。だが、少なくとも「神道と社会」を横軸とし、大正・昭和前期を縦軸とする構図で特集を組めば、そこには従来の味気ない制度論的な近代神道史研究や昨今流行りの理論・枠組みが先行しがちの「国家神道研究」だけでは論じ切れない何かが浮き彫りにされるのでは、といった聊かの期待も編集子にはあった。それが実現されているかどうかは、読者のご判断に任せざるしかないが、編集子としてはそれなりの手応えはあったと思っている。取り分け、限られた聴衆にしか聞くことが出来なかったシンポジウムでの島蘭進氏の「国家神道と軍の天皇崇拜との関係」を論じた氏一流の壮大な「国家神道」に関する基調講演、及びそれに真つ向から対峙する新田均氏のコメントなどがリアルに記録・掲載されており、紙上でも読者は臨場感溢れる学問的スリルを味わっていただけのものと確信している。

本号も六百頁を超えるボリュームとなった。寄稿・投稿して頂いた諸氏ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

（國學院大學神道文化学部教授）